

仏教企画通信

第80号

発行日 令和7年6月1日
発行所 有限会社 仏教企画
〒252-0016
神奈川県相模原市緑区城山 4-2-5
Tel : 042-703-8641 / Fax : 042-782-5117
発行人 藤木隆宣
編集人 塚越雅之
Email fujiki@water.ocn.n.jp

山の神と水神が宿る村

私の村の家がある群馬県上野村は、深い山並みとともに展開している。この村にはさまざまな信仰が蓄積されていて、その多くは今日も受け継がれている。神を祀った場所を一番多くもっているのは山の神で、二番目に多いのは水神である。この様子は山村にいけばどこでも同じようなもので、上野村に特徴的なことではない。

水神が祀られている場所には、不動明王か弁財天の石仏が安置されている。水神というのだから神なのだろうが、祀られているのは仏である。もっとも伝統的な日本の民衆信仰は神仏習合なのだから、神が仏として祀られている。仏が神として祀られている問題はない。

山の神は森を守り、水神は水源を守っているとされているが、そのこと以上の教義のようなものがあるわけではない。にもかかわらず村で暮らしている、山の神や水神に畏敬の念をもちながら暮らし

になってくる。私は上野村の生まれではないし、たまたま釣りに行って相性のいい村があったので、空いていた古民家を譲ってもらっただけである。だから、子どもの頃から山の神や水神になじんできたわけではない。にもかかわらず、いつの間にか山の神や水神に手を合わせるようになった。人がつないできた信仰というより、上野村という土地に記憶された信仰。そんな感じがするの、伝統的な土着化した信仰である。

江戸の町と虚空蔵菩薩

私の東京の家の近くに、玄関脇に虚空蔵菩薩の石仏を安置している家がある。いつ頃から祀られているのかは知らないが、江戸時代は江戸市中和郊外の境目あたりの地域である。道に顔を向けておかれているのだが、江戸時代あたりからあったのかもしれないところがある日その家の前を通ると、家が建て替え工事に入っていて虚空蔵菩薩の姿も消えていた。私がたたずんでいると、通りかかりの女性が声をかけてきた。「仏様は建

て替えが終わったら、またここに戻るそうですよ」。この女性もまた、道ばたの虚空蔵菩薩を気にしていたのかもしれない。数か月後に新しい家が完成し、虚空蔵菩薩は小さければ立派なお堂をつくってもらって、元の場所に戻ってきた。虚空蔵菩薩という札もかけられ、花も生けられていた。

虚空蔵菩薩は、奈良朝の時代から知恵を授け、願いを叶える仏として信仰されてきた。といっても江戸の町にまで伝えられたのは、真言密教との関係をおしてだったのかもしれない。空海には、山林修行中に虚空蔵菩薩求聞持法を修したという伝承がある。

この地域の人々にとって、虚空蔵菩薩は地域の暮らしを守っている土地神様のようなものだったのだろう。仏教をおして伝えられた仏でありながら、神のような存在でもある。そういうものとして、地域の人々の信仰を集めてきた。

てきた。

明治以前の日本に「宗教」はなかったか

宗教、信仰は、明治時代になってから定着した言葉である。英語の Religion、Belief を翻訳する都合で用いられるようになった。だから私は、江戸時代までの日本には宗教も信仰も存在しなかったのだと思っている。だが、日本には太古の昔からさまざまな神が存在し、仏教が伝来すると社会のなかに浸透していった。だから、宗教も信仰もなかったといわれると、不思議な気持ちになるかもしれない。

もちろん明治以前の日本には、神や仏の世界がいま以上に浸透していたのである。だがそれは、今日私たちが考えているような宗教でも信仰でもなかった。もともとは、宗教、信仰はキリスト教からきた言葉で、キリスト教の神への信仰に基づいて、教義や組

なき信仰 信仰

山の神と
仏のいる風景

内山節 [哲学者]

織を形成したものを宗教と呼んだ。この考え方が明治に入ってきたのである。

ところが日本の伝統的な信仰は(いまとなつては信仰という言葉で語らざるをえなくなっているのだが)、宗教へと転じていかなかった。いま述べた虚空蔵菩薩でも、その前を歩くとき手を合わせた地域の人も、それが仏教の仏であることに意識しているわけでもないだろう。その教義を求めることもなく、しかも虚空蔵菩薩信仰をもったとしても、その信仰とともにある宗教組織が存在するわけではない。

上野村の山の神信仰や水神信仰も同じである。山の神が森を守っている、水神が水源を守っているという以上の教義はなく、しかもこれらの信仰に深く傾倒したとしても加盟する組織もない。それらは宗教ではないのである。厳密に言えば信仰でもない。村で暮らしていると、森や水源を守ってくれているありがたい隣人というような感覚で、村人たちは山の神や水神を大事にしている。宗教へと転じていくのが信仰であるのなら、日本の伝統的な信仰は信仰ではない。

村の暮らしと ともにある寺

面白いのはこのかたちで、地域の寺や神社にも受け継がれてきたことである。たとえば上野村は、天台宗の寺が一カ寺、曹洞宗の寺が三カ寺

あるが、檀家の人たちは自分の家の檀家寺が何宗なのかは知っていても、その宗門の教義にはほとんど関心がない。さらにその寺の檀家ではあつても、その寺が属する宗門の一員であると思っているわけでもない。村の寺は、村の暮らしとともにある寺でありつづけているのである。もっとも今日では、上野村の四カ寺はすべて無住寺になっているから、村人の僧侶への評判は悪い。商売にならなくなれば寺を捨てる。村の暮らしのなかに寺があることの意味を、坊さんたちは理解していなかった。だが、いまでも寺は維持されている。檀家さんたちが守る寺として、である。

それは寺のものととの姿だったのかもしれない。宗教的な寺でもなく、厳密な意味では信仰上の寺でもない。村の暮らしのなかに根付いた神や仏を大事にする思いとともに寺が存在する。それが地域の寺だから、である。

宗教は、教義の明確化や組織の形成によって成立した。だから、平安時代に入って最澄や空海が登場してくる以前は、日本には宗教はなかったということもできる。なぜなら500年代に仏教が伝来しても、その後の300年近くの間は、信者を集めていく組織は形成されていなかったからである。この間の日本の仏教は、国家護持を願う国家仏教や天皇、豪族たちの持仏堂的な仏教が一方にあり、他方には山林修行を基盤に置いた民衆仏教が展開していた。

竣工した。設計管理は東京調布市の久保田坦二氏。施工は地元高柳の坂巻工務店であった。典型的な四脚門で、基礎は二、三段ずつ高くし、手のかかる四半敷花崗岩を柏市濱嶋石材店の寄附で取付けた。山門も本堂以来の大建築であり、寄附者名は庭に張出しを作り一枚ずつ下げた。半年の工事中、棟札の他に重建記の銘板作成、檀信徒への何度かの中間報告書の作成、銅板葺きを四枚切りから六枚切りにさせる為の措置、落慶式（翌平成十八年四月八日）に開山四百五十回忌を併修するための諸準備等、多忙の連日であった。山門建立の経緯も諸関係の書類と共に纏め、宝蔵内に保管したほか、『落慶式差定』の小冊子に詳しい。山号額の新設は、道元さまのご親筆の文字を集めて拡大した「集字」で作製した。

⑭ 六地蔵堂

今度は山門外に新調した駐車場の方角に向けて堂宇を新築し、これを頑丈な銅板屋根で覆った。工費は約五〇〇万円で、駐車する車輛を護る形である。前面には鉤の手に植採を施した。故に通常とは一風変った堂宇である。帽子や涎掛けが古くなると、誰ともなく新添するのは諸方と同じである。棟梁は柏市の工匠堂。地下配線の照明を施した。

⑮ 大師堂

今度は平成十二年（二〇〇〇）にまた大師組合の結願を行うとの事で、地元の講中

起こった一揆と江戸時代の百姓一揆のときくらいである。それは自分たちの生きる世界を守るために百姓や地域豪族が立ち上がったもので、やはり宗教上の対立ではなかった。

民衆信仰の平穏な世界

日本に定着した仏教世界が、自分たちの世界を守るために戦わざるをえないときを除いて平穏な世界を築いてきたのは、仏教思想に基づいて平和を求めたということではなく、仏教を受容してきた民衆にとっては、寺とともにある世界は宗教でも、厳密な意味での信仰でもなかったからである。山の神信仰や水神信仰、東京の私の家の近くの虚空蔵菩薩信仰のようなものは、争いを起こしようもない。宗教の歴史には、たえず争いの歴史が内蔵されてきた。それに對して、宗教、信仰という概念から自由な民衆信仰の世界は、平穏とともにあった。



内山節（うちやま・たかし）哲学者。一九七〇年代から東京と群馬県上野村の二拠点生活。元立教大学21世紀社会デザイン研究科教授。近著に『内山節著作集』全15巻（農文協）『平市場経済——成長だけではない「共創社会」の時代』（角川新書）他多数。

貧寺で二十棟も建てた経緯

〔後編〕

千葉県柏市 龍泉院東堂 椎名宏雄

★前号からの続きです。

⑨ 物置

これも江戸時代から存在した古物が老朽化したので、昔戦時中に人が多く集まる所は防空壕を掘るべしという法令により、当時は冬期に何十名かの娘たちに裁縫を教えていた私の母（これも『続沼南の宗教文化誌』一〇〇頁以下参照）が、娘たちを動員して作った防空壕の跡地を三尺ほど掘削した場所に私財で建立。もう保存すべき物品もなくなつたので、間口八間、奥行六間で総板張り総瓦葺きの中を二分し、一階の右側は私のパソコンや蒐集資料室。いわば知的生産の資料兼作業室である。左側は頂戴物や昔からの什具品置場。二階は左右通して、昔の寝具や衣服類。

⑩ 菅谷不動堂

敷地こそ昔からの寺有地であるが、今回の改築は寺有金でも寄附金でもない。地元にある真言宗豊山派吉祥院の基金を頂戴したので、本来はここに書くべき伽藍ではない。そもそも吉祥院という寺は、敷地はそっくり学校に貸して、



《坐禅堂》 龍泉院パンフレットより

の寄附金で地元業者（棟梁長妻正行氏）で改築。番石が破損していたのを、地元の石イ石材さんが寄進して立替えた。

⑬ 墓地水舎

これも従前の堂宇が破損していたので、地元の石井造園さんが改築。前回新築の時の資金繰越金でまかない、今回は任意寄附。前にはツツジなどの花木を植樹し美化を企つた。

⑪ 坐禅堂

当山の歴史に残る画期的な業務。客殿や会館などの部分的改修などではなく、禪宗古来の規矩に則って、本格的なスタイルをとる独立棟の坐禅堂としては、現在のところ県下では他に例をみないもの。建築の主体は当山参禅会であ

寺は解体された。当然、学校からの貸地料は毎年何百万円かが入金となる。施食会を行ったりしているが、まだ積立金は豊かである。そこで市は地元の同意があれば同じ仏教の建築ならばよいということとで、菅谷不動堂の再建金にも融通してくれた、という訳。尤も、代々龍泉院総代が吉祥院の総代も兼ねており、十年余りは依頼により私が吉祥院住職を「兼務」していたこともあるので、この金員融通については、何処からも誰からも異論は皆無であった。総代方は格別の尽力をしてくれた。私はこうした経緯を詳記した銘板を作り、堂内に掲げた。

⑪ 客殿

昭和五十六年、地元の業者（棟梁は故古川国男氏）による建立。ただし、客殿とは名のみで、極く平凡な和風建築。トイレは必要なので本堂への登りの段下に設けたが、ここだけは防火壁を付した様式とした。棟梁は玄關の屋根構造に手こずり、逸早く飯場を設けて本堂の建築に当たっていた社寺建築士の有井建築から教示を受けたことは、これも

を集めている『愛敬、稲荷』と妙見の合祀堂で、寛政二年（一七九〇）に天外泰仙が奉祀し、大正三年に再建されて老朽化。平成二十八年（二〇一六）に再建。「稲荷」妙見の両掛軸が石井操さんによって奉納され、両尊も再色され見違えるばかりとなった。棟梁は工匠堂。すでにこの宮大工はこの寺のお抱え業者的な存在です。

⑬ 車庫

平成二十三年に強力な大浪のスレート屋根で間口三間半（普通車二台が案に並列に置ける中）の頑健な建物に建替え。経費は私の個人負担で、工事は工匠堂。

⑫ 宝蔵

⑫の東堂と共に全くの新築で工匠堂の工事であるから、地鎮式も落慶式も一緒。宝蔵は間口三間、奥行五間で瓦葺き板張りの二階建て。一階には昔の大給馬類を長押に掛けて下から案に見上げられ、広い棚には掛軸一〇〇本ほどを安置。別に戸棚を二つ設けて重要書類を保管。奥半分は二階とし、スチール戸棚三つを入れ、古文事約一千点や和本類一千冊ほどを納入。外装は昔の大和蔵式の四半敷張りのタイル風塗りの白壁。入口の鍵は二重とし、火災報知機付け。入口の「宝蔵」の額字は、道元禪師の真蹟からの集字で、拡大して専門家に彫刻してもらった。書庫などの家具を別にする、工費約一、五〇〇万円は寺の常住よりの

前著に記した通り（『続沼南の文化誌』一一五頁）。

⑫ 本堂

私の住職在任中、坐禅堂と並んで最大の建造物であった。設計は松戸市の中村詔雄氏。造営は東京の有井建設会社。基金は寺の北西先の山林売却費約一億二千万円と檀信徒からの寄附金約六千万円。利子等の収入を入れると約二億近い経費の出入であった。当時は幸か不幸かバブル経済の最中で、入金を預金しておく、何か月かで何十万円も増えた。建築工事は昭和五十六年から始まり、現在の坐禅堂迎りに飯場を設け、土木工事から加社・組立・造作すべてを同会社の人々の協力で仕上げた。上棟には揃いの法被を着用し、諸儀式を如法の如く行い、建



《山門》 龍泉院参禅会会報誌「明珠」より

捻出で、平成三〇年春の完工。

⑫ 東堂

住職の私的な居住棟として私財を投じての建築であり、経費は約三、〇〇〇万円。大きさは間口六間、中五間で若干凸凹あり。宝蔵と同じく全般に板敷で瓦葺き。近く参禅会の事務室に贈与する予定。

⑫ 大師堂・⑬ 永代供養墓・⑭ 待道堂

以下、紙幅がないので名称だけとする。⑫の大師堂は地元講員による再建。⑬永代供養墓は時代の要請により無墓の方の使用にとの設置で柏の濱嶋石材さんの造立。⑭待道堂は地元講員の寄進で平成八年三月の再建。大工は地元の小森一男氏畢生の傑作。（『沼南の宗教文化誌』二五二頁以下参照）。

以上、縷々綴ってきたが、みな古物の再建や時代の産物ばかりで、決して私の自慢話などではない。一つだけ残念で心残りなのは、戦事中まで残っていた鐘樓の再建が不能だったこと。やれば出来たのであるが、平成頃から諸方で「早朝からの大声で煩くて困る」という声が強いのを聞き、一時は関係資料まで集めたが断念した。無仏法界の象徴か。住職の私が大いに尽力し、ほとんど独力で完遂し来山者に喜ばれているのが山門外の駐車場新設である。

これは地権者との地所交換を伴っていたので、図面作成から測量、農業委員会との折

造物の上には高く上屋を掛けて、完工するまでは徒に立ち入りできなかった。故に昭和五十七年の盆施餓鬼は当山始まって以来、前庭に天幕を巡らして行い、無事に完遂できた。寺号額は時の永平寺貫首、秦慧玉禪師に書いて頂いた。この大工事の状況や十六mmフィルム、各種の写真や諸道具・記録類はすべて宝蔵に保護されている。平成五十七年三月の完成引渡しであった。なお、本堂完工を期として、火災保険は元より、火災報知機の設置を本堂・客殿・観音堂などに施し、災害に備えた。

⑬ 山門

昔、寛政八年（一七六九）築造のものが老朽化により、平成十七年春に解体し、檀信徒の寄進により同年十一月に

衝、地権者への懇願など、市役所や個人宅に何度足を運んだことか。だがその間、私への恥辱や罵倒にも耐えたからこそ、利用者にとっては最善の、山門のすぐ外という場所に普通車五〇台も駐車可能な、恐らく寺院として稀有の便利な駐車場を有する寺となり得た。自分が我が捨ててかかれば必ず大自然が味方してくれる、という道元さまの教えを信じて行動したので。

三十年以前の十月三日、千葉県曹洞宗第八教区（大原町・御宿町方面）の護持会員五十名ほどの僧侶がバス二台を連れて龍泉院へ来山した。県内で美化した寺の参観研修であった。私は右に綴った事柄を要約お話しして喜ばれたしかし半面、これを僻んで悪口を云った和尚が居たそうである。だから千葉は無仏法といわれるのだ。所詮、他人の労苦などは、当事者ではなくては到底分からぬもの。新改築もさることながら、それらの維持管理の大変さは、まさに大変、大変。

椎名宏雄（しいなこうゆう）

龍泉院（千葉県柏市）前住職。駒澤大学大学院博士課程満期退学後、曹洞宗宗学研究所研究員、曹洞宗文化財調査委員、柏市文化財保護委員会会長、駒澤大学大学院非常勤講師等を兼務しながら一九五八年より龍泉院住職。（宋元版禅書の研究）（大東出版社、『やさしく読む参同契・宝鑑三昧』（大法輪閣）、『沼南町の宗教文化誌』（たけし出版）など著書・共著ともに多数。

▼時代に対応するよりも、基本の教えにどう向き合うかを大事にするというお話は素晴らしいと思いました。

神野副会長…さらにいえば、お寺や僧侶が檀務だけをやるのではなく、社会とつながる活動をするべきだと思っています。その中で、青年会の活動はまさに社会とつながるものになっていくと思います。

全曹青の場合は基本的に40歳までの僧侶で組織されます。各都道府県の青年会も、違いはありますが、基本的には若い僧侶が集まっているのが青年会です。青年会でのさまざまな活動を通して、その経験をもとに、将来お寺の住職や責任ある立場になった時に力を発揮できるようにしたいと思います。全曹青は北海道から九州まで、さまざまな地域の人が集まります。同じ曹洞宗でも地域によって差があり、集まって話すだけでも貴重な経験になります。集まった青年僧侶がお互いを尊重し合い、自己研鑽に努め、それが心豊かな社会形成につながる懸け橋になればと思います。

50年の歴史から学ぶ

▼いろいろな活動をしながら、ご自身の研鑽の場としても育んでいきたいというお考えです。

菅事務局長…全曹青は前期

(第25期)に創立50周年を迎え、私はこの2年間、全国曹洞宗青年会の創立50周年事業に関わってきました。特に歴史をひもとく作業をしてきたのですが、50年前の初期の頃から現在までの広報紙面などを読むと、いつの時代にも、お寺の役割は「社会に関わっていく必要がある」という考えがありました。

当時のスローガンには「お寺をコミュニティの場」というものもあり、今感じる社会変化と同様に、50年間のどの時代にも社会の変化があり、時代毎の諸先輩方がそこに挑戦し続けてくださったから今があるのだと思います。

諸先輩の姿に習って、目の前の問題に目をそらさずに向き合っていく姿勢を受け継いでいきたいです。これからという活動をするかという声が上がった時に、それが実現できるよう対応していくのが私の役割だと考えています。

時代の課題と向き合う

▼50年前と今で同じような問題を抱えていたという話も面白いですね。現在、課題となっていることは何かありますか？

宮本会長…やはり人口の減少が大きな課題です。お寺の経営でいえば檀信徒の減少があり、会でいえば会員数の減少が挙げられます。それに伴い、1人1人の負担が大きくなっています。

私は37歳ですが、私が地元

は副住職や徒弟さんが多かったですが、今は若い方でも住職という方が増えています。これは後継者のいないお寺を兼務する必要があるためです。地域での役割も増え、一人ひとりの負担が大きくなっているのが課題のひとつです。

また、お寺の若い住職は同じ悩みを持つ仲間に出会う機会が減少しているように感じます。人口が減って、担い手が減り、日々の活動が忙しくなると、青年会にも出られなくなる人も増えるでしょう。そういった方々もお互い支え合う場として機能できればと思っています。

▼一般人から見ると、僧侶の方々は人間的に完成されている、何でも話を聞いてくれる存在だと想像しがちですが、それなりの課題や業務の忙しさがあるんですね。

宮本会長…檀家さんや一般の方には悩みや愚痴を言にくいので、同じ僧侶、それが先輩であったり同年代であったりする人にしか話せないことはあります。

青年会の魅力と今後の展望

▼今後充実させたいところはありますか？

神野副会長…青年僧侶の数自体も減ってきています。これは人口減少の影響で仕方ない部分ですが、青年会に来る人も減ってきています。忙しいお寺の人が青年会に出てくるのは難しいと思いますが、青



年会に入る良さをしっかりと示していくことも大事です。50年前も同じ課題があったことをお話しましたが、当時は僧侶が外に出て社会とつながっていくという時代でした。今は原点に立ち返って、私たち青年僧侶がどうやって成長していくか、どうやって協力し合いながら研鑽していくかをもう一度考える時代になってきているように感じます。

現代社会と禅の広がり

▼一部には禅ブームやマインドフルネスのような表現で、坐禅や瞑想に取り組む若い人たちも増えていると聞きますが、そういう実感はありますか？

神野副会長…50周年の記念事業で各地域のカフェを借りて坐禅会を行いました。カフェで行うことで普段そこに集まる若い人たちが坐禅を体験してくれることがありました。同じ坐禅でも、興味のある方だけでなく、興味のない方にもきちんと情報が届くようにしたいです。

宮本会長…50周年事業で歴史を振り返ると、青年会の初期には「山門に掲示板を立てよう」という運動をしていました。SNSも言ってみれば同じで、告知をするという点では基本は変わっていません。興味のある方もそうですが、興味のない方にもしっかりと知らせるというところで、時代に合わせてツールが変わっているだけです。

坐禅に興味がある方の割合は、以前とあまり変わっていないと思います。ただ、居住地の変更などで菩提寺との物理的距離が離れてしまったので、地元のお寺で坐禅会に行くという機会は減っています。若い方は自分で本を見たりして学ぶこともあるでしょう。

一方、国際的には違って、海外では本場に花開いている印象があります。歴代の方々が国際関係で活動されてきたことが今、実を結び、海外では広がっているのではないかと思います。

菅事務局長…SNSについては、私が全曹青に入った8年前から広報委員会に所属しており、SNSに触れる機会が多くなりました。しかし、SNSはシステムの仕様変更が目まぐるしく変化するので、3カ月前に良いとされた使い方が、3カ月後にはまったく違うこともあります。

全曹青は学びの場や研修の場を提供する役割がありますが、提供するものが常に正確かつ最新の情報を提供する必要があると思います。そのためにはアンテナを常に張っておく必要があります。

僧伽としての青年会

—— 貫首の言葉に込められた思い

宮本会長…50周年記念事業で両大本山の永平寺・總持寺に参拝しました。現在の石附周行禪師(總持寺貫首)は全曹青の第二期会長もお務めになられており青年会員にご指導をいただきました。

禪師様がおっしゃられたのは、青年会は「僧伽」(サンカ)だということです。修行は両大本山などでさせていたいただきますが、青年会も一つの僧伽だと言われました。青年僧侶同士でしっかりと研鑽を積み重ねなければならないというのが会の目的にもあります。互いに切磋琢磨し、「ともに歩む」ことの必要性を強く感じています。

インタビュー・塚越雅之

第26期
全国曹洞宗青年会
インタビュー

「ともに歩む」 —— 変わる時代に寄り添う曹洞宗の若き僧侶たち ——

第26期全国曹洞宗青年会(全曹青)が始動しました。宮本新会長をはじめとする新体制が掲げたスローガンは「ともに歩む」。人口減少や社会の変化に対応しながらも、仏教の本質を大切にし、僧侶同士の絆と社会とのつながりを深める活動に挑むリーダーたちの思いを語ってもらいました。

参加者
宮本昌孝 会長
(昌福寺・山口県)
神野太賢 副会長
(地蔵寺・愛知県)
菅悠生 事務局長
(西金寺・広島県)

▼本日は、ご就任にあたりみなさまのご抱負などを伺いでできればと思っています。いろいろ混迷を極める世の中です。貧困や格差社会、孤独死、自然災害ほかさまざまな問題が人々の暮らしを不安なものにしています。そんな中でお寺に求められる課題と、これにどう応えるかをざっくりばらんにお話しいただければと思います。

スローガン「ともに歩む」に込めた思い

宮本会長…第26期のスローガンは「ともに歩む」とさせていた দিয়ে おります。このスローガンには、私たち僧侶が協力して歩むという意味と、檀家さんや地域社会の人と歩むという両方の意味があります。

私自身も、青年会で素晴らしい仲間に出会えています。各寺院は独立した法人でもありますが、私たち僧侶は繋がりがなく、それぞれのお寺で孤立しがちです。全曹青(全国曹洞宗青年会)は全国各地の曹洞宗青年会が加盟している連絡協議体として、各青年会と協力し歩むとともにした

いと思っています。また全曹青のテーマのひとつに「社会にしっかりと出て一般の方と一緒に明るく社会をつくっていく」というものがあります。一般の方々とも寄り添っていききたいと思っています。

災害時には大切な人を亡くされた方々と、ともに少し立ち止まって同じ目線でいたり、例えば、一緒にお茶を飲むなどして、少しの時間でも寄り添うことが大切かと思っています。

具体的な活動と組織の役割分担

▼このスローガンのもと、具体的に何か目標や活動はありますか？

宮本会長…一般の方に仏教への親しみを持ってもらうための塗り絵や、SNSを活用した連載企画。青年僧侶に対しては、海外の寺院の現状を学ぶ研修会や、失念しやすい作法を学べるコンテンツの作成などを企画しております。

全曹青はボランティア活動も活発ですので、能登の支援も引き続き行っていきたいです。私の任期の2年目の時には阪神・淡路大震災の三十三回忌、また東日本大震災の十七回忌にあたりますので、あわせての企画も検討しております。

検討された企画は、年5回ほど各管区理事にお集まりいただきご審議をいただきます。その内の2回は各加盟曹青会にもお集まりいただいており

ます。また対面での会議だけでなく、今はSNSやビデオ会議ツールを活用して日常的に意見交換を行っています。

▼神野副会長のお立場は、宮本会長をサポートしていくということですか？

神野副会長…全曹青の中には委員会があり、総合企画委員会、広報委員会、国際委員会、教化委員会などがあります。それぞれの委員会で活動を練り、協議して実行していきます。副会長は私以外にも2人、合計3人います。その3人が宮本会長と菅事務局長と話し合いながら全体を見てサポートしていきます。

海を越える活動
国際交流の取り組み

▼国際委員会とおっしゃいましたが、世界がターゲットになるのですか？

神野副会長…そうですね。第25期では韓国の曹溪宗の僧侶の方々とオンラインで交流会を開催し、青年僧侶向けの国際研修会を行いました。また、ブラジルとビデオ会議ツールでつないで、ブラジルにいる曹洞宗の若い僧侶たちと交流したりしました。

世界中に曹洞宗の寺院がありますので、各地域とつながりながら、あるいは曹洞宗以外とも連携しながら活動していきます。もちろん仏教徒以外にも、外国人向けの企画も展開しています。

▼仏教徒以外というと、ボラン

ティア的なことや布教活動ですか？

神野副会長…ボランティア活動でいえば、たとえばシャンティ国際ボランティア会という団体は、もともと曹洞宗が行っていた国際協力の活動から始まった団体です。そういった団体と協力して、海外の災害時の支援活動を行うこともあります。

他にも、コロナ禍ではオンライン坐禅会を英語で開催し、海外の方に参加していただくなどの活動も行いました。

縁の下での力持ち
事務局の役割

▼幅広いですね。菅事務局長のお役割はどんな領域ですか？

菅事務局長…事務局は裏方として、会長・副会長が円滑に活動できるよう、目に見えないところでサポートします。特に会議体においては会議を進行し、たくさんの方の事業や活動をするにあたり、みなさんの理解を得られるよう働きかけます。

予算確認はもちろんさせていただきますが、会計の役職もありますし、予算は三役全体で確認しながら進めます。宮本会長…各県の青年会にも会長と事務局長はおられますが、会長と事務局長が中心の柱となり、二人三脚で動いています。副会長はそれをつき支え、時には違う視点から意見をしてくれる存在です。基本的に会長と事務局

長は毎日連絡を取り合い一心同体の活動となります。

変わりゆく時代のなかでの
お寺の役割

▼人口の減少などで、檀家さんが減ってきていき、お寺の役割が変化してきています。今までの伝統的な活動を続けつつ、時代のスピードに対応していくのは大変だと思います。

宮本会長…私は危機感も持っておりますが、けっこう楽観的で、仏教の素晴らしさを信じています。歴史的に見ると辛い時代、大変な時もありました。戦争や食糧不足に困った時代もありました。それでも仏教は現在に伝えられてきた。まずは綿々とつながってきたこのみ教を真摯に実践することが一番大事だと思います。

ある時、子どもが「お寺さん、ずっと姿勢が伸びていてカッコよかった」と言ってくれたこともあり。まずは基本を重んじて、小さなことから第一にやっていくべきです。その上で、時代に合わせた新たなことをやっていくのが必要になると思います。

例えば今はSNSがありますが、昔で言えば山門に掲げる言葉やポスターと似ています。時代に合わせたツールを使っていけばいいと思います。本質自体は変わりません。

ただ、これから人口が減っていく一方で、私たちが地域社会で担う役割は増えていくでしょう。そのため、僧侶が独りで孤立しないようにするため、青年会でサポートしていくことが求められると考え

視覚障害を持つクライマーで、パラ・クライミングの世界選手権四連覇を成し遂げ、現在はNPO法人モンキーマジックを中心に、クライミングの普及活動を行っている小林幸一郎さんへの取材をする機会に恵まれた。詳しいインタビューは『曹洞禅グラフ』一七三号に掲載されているが、そこに盛り込むことができなかった話もある。

教えずすぎない関係性

中でも「教えずすぎてしまう問題」の話は印象的だった。わたしたちが日々の暮らしの中で障害を持つている人と出会うとき、どこか障害のことを意識しすぎてしまうということがある。そしていちど「障害者」という概念の中に相手を押し込めてしまうと、相手を特別視するあまりか、かえって相手との関係が硬直したものになりかねない。そのことを示しているように思えたからだ。

モンキーマジックでは活動に際して、クライミングで壁を登っていくときにHKKという概念を用いる。次につかまるべき岩の「方向、距離、かたち」を略したものが、重要なこれらの情報を視覚ガイドが岩壁の下から仰ぎ見て壁を登っていく視覚障害のクライマーに伝える。

視覚ガイド役の参加者は客観的な情報伝えるのが役割だが、ただ、中には勢い余ってか、「その岩を右手で掴んで」などと、具体的に「指示

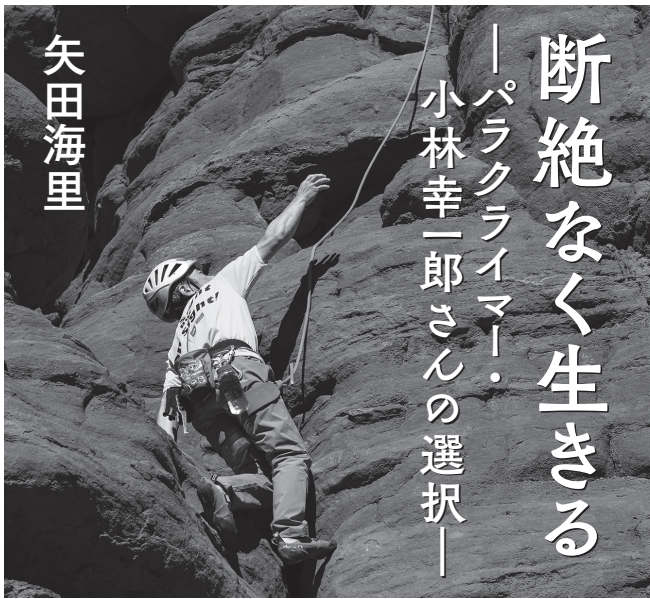
を出してしまいうこともあったという。しかし岩壁にとりついているクライマーにとって「次の岩をつかむ」という局面をひとつとっても、右手で掴むのか、左手で掴むのか、はたまた足の重心や体勢を微妙に変えた後にその岩に手を伸ばすべきなのかといった多様な選択肢があり、その選択の面白さにこそクライミングというスポーツの醍醐味がある。にもかかわらず、指示を出してしま

と、だんだんとクライマーと視覚ガイドの関係が操り人形のようになってしまい、スポーツの楽しさを阻害しかねないというのだ。

この話にははっとさせられるものがあった。「教えずすぎてしまう」ことをめぐる難しさは、突き詰めて言えば「私」と「あなた」との間にどのような境界を引くかという問題であり、それは教育や子育て、ビジネスなど、私たちの生活を取りまくあらゆる場面で顕在化する普遍的な問題であるように思われたから

害のある人もない人も、交流するうちに互いにできることとできないことがわかっていき、やがて相手が特別な存在ではなくなくなっていくという。私自身も他の参加者と話してみると、視覚障害と言っても、

び込み営業、アウトドアの会社での企画運営など、様々な経験がまじりあってモンキーマジックの活動に繋がっていったという。視力を失ったことで「過去の生き方を捨てる」のではなく、それまでの経験をひとつひとつつなぎ合わせ、いわば別の生



過去の生き方をつなぎ合わせて、クライミングを軸に新たな生き方へ

たとえば視野の中心だけが見にくく、周辺は割と見えるなどという具体的な状況が語られ、その人にあった視覚ガイドのやり方はどんなものかという模索がはじまり、それがやりがいのある新たな課題のように感じられた。「普段出会うことがない障害者のことを非常に身近に感じられるようになった」、「特別な人だと思っていた障害者のことを身近に感じられて、普通に声

モンキーマジックが生む居場所

一方で、視覚障害を持った参加者からは「障害があるということを気にせずに受け入

をかけられるようになった」、「だからこうやって一緒に遊ぶことの価値があるんだ」これまでの参加者の中にはそんな印象を持った人も少なくないという。

き方へと組み替えることができた。そのような道を描くことができたことは、すごく幸せなことであつたと、小林さんは言う。 私たちの人生に何か予期せぬ出来事が起き、それまでの生き方に変更を余儀なくされた時、ある局面では過去の生

いた。そのことを周りの人から聞いて、死に対する恐怖を超えるような境地を察知したようです。漱石は、奥さんともうまくいっていなかった。子どもの頃の辛い経験もありました。親との親しみが薄かった。『こころ』では自殺の話が出てきたり、『行人』では、心を病んだ知識人の話が出てきたりします。

晩年のエッセイ「ガラス戸の中」などありますが、ここにはそんな寂しさを踏まえて家族への想いが語られています。『門』にも出てきますが、漱石は禅をやったことがありますが、悟りは得られなかったと書いてあります。でもやっぱり禅に非常に惹かれていました。漱石は漢詩を作ります。彼の漢詩の世界と、禅は多分つながっていたと思います。そして、辛かった子ども頃ののことを思いながら、飄々とした南画のような世界を願っている。私はそこに宏幹先生と通じるものを感じます。

最近、夏目漱石のことを勉強しています。漱石は、40代で亡くなったんですが、死ぬちょっと前に血を吐き、意識を失いました。自分ではなんともない思っていたらしいですが、ほとんど死にかけて

れてもらえることがうれし「い」という声も寄せられてきた。私が参加中に知り合った視覚障害を持つ女性も、過去に他のクライミングジムに行ってはみたものの、周りの参加者が視覚障害者の参加を想定していなかったためか、なんとなく行きづらい雰囲気があったと言う。彼女にとって、モンキーマジックは一つの居場所のようになっているようだった。このように見える人、見えにくい人、

見えない人がそれぞれにそのままで一緒に楽しむということ を「あるべき社会の縮図」だと小林さんは捉えている。

こうした小林さんの考え方は、彼自身のクライミングが主 題となった映画『ライフ・イズ・クライミング』を通して も知ることができ る。この映画は、視覚障害を持つクライマーの小林さんが視覚ガイドの鈴木直也さんに誘われて、米国ユタ州のフィッシュャー・タワーズという絶壁の登頂を目指す過程を捉えたドキュメンタリーで、監督の中原想吉氏はこの作品で日本映画批評家大賞を受賞した。

自らが主人公と言ってもいいようなこの映画に対する小林さん自身の見方は独特だ。いわく、この映画はクライミング映画でもなく、障害者のチャレンジを描いたわけでも

き方を捨てなければならないと感じても無理はない。しかし小林さんの話を聞いていると、捨てねばならなかったはずの過去とどこかに、その先の自分を導いてくれるものが眠っている可能性があるのだと思えてくる。もし、それらの経験の断片をつなぎ

味、の鋭い仕事をなさった。若い頃に、イギリスのエドワード・エヴァン・エヴァンズIIプリチャードという素晴らしい人類学者の『宗教人類学の基礎理論』を訳してま す。この本はとっても大事な本なんです。これは古野清人先生に導かれたものでしょう。古野先生の仕事ぶりに習われたところがあると思いま す。一九八〇年には中公新書に『シャーマニズム・エクスタシーと憑霊の文化』という本を執筆されました。その頃、宮田登さんや山折哲郎先生とともに仲良くなれていて、『季刊 現代宗教』を出して いました。これはアカデミック だけど、とてもわかりやすい。お人柄もそれぞれ独特な庶民性のある方々ですが、私は先生の仕事のこうした側面にも影響を受けました。

若い研究者を引っ張って いく一方、大いに先輩、同輩、後輩を大事にされました。当時、駒沢宗教教学研究会には、民俗学の桜井徳太郎先生や文化人類学の吉田貞吾先生、中国の道教の研究者の窪徳忠先生もいらっしやいました。私は窪先生にもいたへん可愛がっていただきました。

味、の鋭い仕事をなさった。若い頃に、イギリスのエドワード・エヴァン・エヴァンズIIプリチャードという素晴らしい人類学者の『宗教人類学の基礎理論』を訳してま す。この本はとっても大事な本なんです。これは古野清人先生に導かれたものでしょう。古野先生の仕事ぶりに習われたところがあると思いま す。一九八〇年には中公新書に『シャーマニズム・エクスタシーと憑霊の文化』という本を執筆されました。その頃、宮田登さんや山折哲郎先生とともに仲良くなれていて、『季刊 現代宗教』を出して いました。これはアカデミック だけど、とてもわかりやすい。お人柄もそれぞれ独特な庶民性のある方々ですが、私は先生の仕事のこうした側面にも影響を受けました。

くの視覚障害者があんな・針灸・マッサージの仕事に就いたり、その資格を取ろうとしたりしていた。その話を聞いた小林さんの目には、彼らがそれまで生きてきたそれぞれの生き方を捨てなければなら ないように映ったという。もちろんあんな・針灸という新しい仕事にやりがいを見つけて前向きに取り組んでいる人もいたのかもしれない。しかし結果的に小林さんが進んだ道は違ったものになった。

将来を模索する小林さんの中で、クライミングの存在がいち趣味から、生き方の中心へと重心をずらし始めることになる。大きなきっかけの一つは、同い年の視覚障害者を持つアメリカ人クライマー、エリック・ヴァイエンマイヤー氏との出会いだった。

視覚障害者持ちながらも、世界最高峰のエベレストに登頂したというエリックは、人間の可能性を拓く大きな存在だった。彼との交流の中で感 化されたこともあり、やがて視力を失いつつある小林さんの前に「過去の生き方を捨てる」とは別の道が拓けはじめる。視力を失いつつも、クライミングを諦めるところか、楽しんでやっている。そんな自分にしかできないこと、伝えられないことがあるのではない。視覚障害者を持つ人も、他の視覚障害者を持った人々にクライミングの楽しさを伝えていくという、まだかたちのない役割への確信を少しずつ深めていく。

小林さんが「過去の生き方

誰かの未来を照らすことにな るのかもしれない。 矢田海里（やだ・かいり） ライター。著書に『潜匠』遺体引き上げダイバーの見た光景』（柏書房）。



下北沢・永正寺で行われた一周忌の様。挨拶をした島蘭進氏（前列・左端）ほか、生前、佐々木氏と交流のあったみなさんが集った

佐々木宏幹先生 一周忌

二〇二四年二月二六日に逝去された宗教人類学者で駒澤大学名誉教授の佐々木宏幹先生の一周忌が、二月二四日、下北沢・永正寺で行われました。この日はかねてよりご親交のあった、東京大学名誉教授・島蘭進先生、駒澤大学名誉教授・佐藤憲昭先生、國學院大學の高見寛孝先生がご出席され、島蘭先生が挨拶をされて佐々木先生を偲びました。

【一周忌のご挨拶】 飄々とありながら 精力的な仕事に邁進した 宏幹先生を偲んで 島蘭進

「東京大学名誉教授」

本当にあつという間です。もう一年でございいます。

いろいろな思い出があります。とにかくあつちこつちでお酒を楽しませていただいたききました。心に残っていることの 一つは、峯岸孝哉先生（仏教学者・駒澤大学名誉教授）と本郷で一緒にしたときのことです。

お二人ともお酒が強く、3人でお寿司屋さんなどを回りました。峯岸先生とのお話がとても楽しかったのですが、後から宏幹先生が峯岸先生の

16

16

編集後記

藤木隆宣

お考えであろうか。宗務所単位で教区の代表者を選んで真剣に議論すべきだと考えます。この問題点の集約が宗門の教化に反映されればと考えます。

各県の宗務所は宗務庁の下部組織ですが、現場を押さえているのは宗務所です。現場の意見が反映されていく組織体制にしないと、いつかはあてにならない組織になります。今の曹洞宗の組織はまさしくあてにならない組織になってきているように思えます。

宗議会議員がいつまでたっても変わらないのもその姿の典型です。私が関わる町の自治体では会員が少なくなってきた、大きな問題になっていきます。地域住民の4割しか自治体会員に入っていないのが現状です。お寺もそのようにならないようにしないと（このままでは）そうなります。

今号から「曹洞禅グラフ」と「仏教企画通信」の編集は塚越さんが担当します。ご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。合掌 ⑬

年になりました。私の本務地

は東京都第3教区にある永正寺です。典型的な信者寺で先住さんと私が築いてきた信者さんに支えられているのですが、檀信徒の組織がより強固な組織を築きたいと四苦八苦の毎日です。全国のご寺院からは「経営は弟子に伝えてきたが佛法を伝えていない」と言う話をよく聞きます。私もそう思う一人でありますが、弟子に佛法が伝わっていないことが本当だとすれば、仏事の現場で世間話が出来ても肝心な話ができていることになり、せっかくのいいチャンスを生かし切れていないことになり

ます。現代教学を充実させて、若い世代が布教しやすいようにしないといけないと考えるのは私一人ではありません。多くの住職たちが思っていることであります。

曹洞宗の弱いところは「現代教学がしっかりしていない」とよく言われています。問題点はここだなとつくづく思います。これからのお寺は、墓質だけでは持たないと思

アメリカのトランプ大統領

の行動に世界は翻弄されています。トランプさんはただ国内の事情を鑑み、事を起こしているものと考えます。もともと自国第一主義は仕方がないことで、どの国もそこを念頭に置いて動いています。昔から日本は資源のない国であり、他国の協力なしでは成り立たないのは周知の事実です。その事を踏まえて政府は動いています

が、自由主義陣営のリーダー・アメリカにも、「利他行」の精神を理解していた

年）ですからおかげさまで43

「曹洞宗総合研究センター」

はこれら

「修証義」を

「現代社会

「曹洞宗総合研究センター」

はこれら

「修証義」を

「現代社会

「曹洞宗総合研究センター」

はこれら

「修証義」を

「現代社会

「曹洞宗総合研究センター」

はこれら

「修証義」を

「現代社会

「曹洞宗総合研究センター」

はこれら

「修証義」を

「現代社会

「曹洞宗総合研究センター」

はこれら

「修証義」を

「現代社会